

KANSAI GAIDAI UNIVERSITY

イberoアメリカ研究センターニューズレター vol.12 (2022 年度)

IMÁGENES DE IBEROAMÉRICA

EL CENTRO DE ESTUDIOS IBEROAMERICANOS



Callejón de la Soledad (Toledo, España)

目次

公開講座

2022 年 7 月 8 日（金） マルチメディアホール & オンライン

ガリシアの観光 ―緑・青・灰―

畠中 昌教（久留米大学）

Tourism in Galicia: Green, Blue, and Gray HATANAKA, Masanori (Kurume University)

1

<https://www.kansai-gaidai.ac.jp/news/detail/?id=1521&cat=2>

2022 年 6 月 8 日（水） マルチメディアホール（中継） & オンライン

フラメンコ、一流ホテル、どら焼き ―人生の変遷は続く！―

谷口 麻紀（Cafetería Zocodover 経営者）

（スペイン語学科卒 1990 年）

El flamenco, un hotel de primera categoría, los *dorayakis*:

¡La vida seguirá buscando muchos caminos!

TANIGUCHI, Maki (Dueña de Cafetería Zocodover)

(Graduada del Departamento de Español, 1990)

7

https://www.kansai-gaidai-dousou.jp/activity/news/index.php?c=topics_view&pk=1655252841

第 15 回スペイン語教授法研究会

2 de julio de 2022, sábado ONLINE / 2022 年 7 月 2 日（土） オンライン

De la investigación a la docencia: reflexiones sobre el diseño de actividades

MENDEZ SANTOS, María del Carmen (Universidad de Alicante)

研究から教育へ ―アクティビティデザインに関する考察―

メンデズ・サントス, マリア・デル・カルメン（アリカンテ大学）

12

連続公開講座
南米音楽紀行（全3回）

第1回 2022年10月18日（火） マルチメディアホール & オンライン

国境なきブラジル音楽

エジソン・マイサト（歌手）

Música brasileira sem fronteira

Edison MAISATTO (Singer)

19

<https://www.kansai-gaidai.ac.jp/news/detail/?id=1599&cat=2&u=2>

第2回 2022年11月11日（金） マルチメディアホール & オンライン

アルパとともに半世紀

ルシア塩満（音楽家）

Medio siglo con el arpa paraguaya

Lucía SHIOMITSU (Música)

21

<https://www.kansai-gaidai.ac.jp/news/detail/?id=1632&cat=2>

第3回 2022年11月24日（木） ICCホール & オンライン

アルゼンチンタンゴと私

Sayaca（大澤 さやか）（タンゴボーカリスト / 企業向けグローバル研修講師）

Argentine tango and me

Sayaca (OSAWA, Sayaca)

(Tango vocalist / Instructor of Cross-cultural Courses for Business People)

26

<https://www.kansai-gaidai.ac.jp/news/detail/?id=1649>

メキシコ・日本芸術文化研究会

21 de octubre de 2022, viernes 2022年10月21日（金）本館3階 302会議室

Encuentro de Investigación sobre Cultura Iberoamericana con el Seminario Permanente de Investigación de Arte y Cultura México-Japón

TRONU MONTANÉ, Carla (Universidad Kansai Gaidai)

「メキシコ日本芸術文化研究常設セミナー」との学術交流

トロヌ・モンタネ, カルラ（関西外国語大学）

33

<https://www.kansai-gaidai.ac.jp/news/detail/?id=1608>

教員エッセイ

ルミ
Rumí

土井 裕文（関西外国語大学）
DOI, Hirofumi (Kansai Gaidai University)

..... 37

表紙解説：中世以降、建て替え制限の厳しいスペインのトレド。Callejón de la Soledad は、幅が 86 cm、迷路のように入り組んだこの街の中でも最も狭い路地である。
(谷口麻紀氏より提供)

公開講座

2022 年 7 月 8 日（金） マルチメディアホール & オンライン

ガリシアの観光 ―緑・青・灰―

畠中 昌教（久留米大学）

Tourism in Galicia: Green, Blue, and Gray

HATANAKA, Masanori (Kurume University)

Abstract:

Spain, one of the world's leading tourism countries, has attracted attentions in Japan. The tourist image of Spain in Japan is "flamenco, Don Quixote, Gaudí," or more recently, "La Liga Española." However, this image represents only a part of the complex and different culture and land of Spain. So, in this lecture, we will see Spain's diverse tourism from the perspective of tourism geography. After grasp the diverse typology of tourism, we focus on Galicia region in the northwestern part of the country, which is still not well known in Japan. We also consider some specific cases of tourist destinations in Galicia. Let's travel together through the landscape of Galicia, which is considered as "mosaic of green, blue, and gray!"

ガリシア州の概況

ガリシア州は、北緯 41 度から北緯 44 度の間に位置し、スペインにある 17 自治州の一つである。県レベルにおいてア・コルーニャ県、ルーゴ県、オウレンセ県、ポンデベドラ県の 4 県からなり、市町村レベルにおいて全部で 315 市に分かれる。州都は、ア・コルーニャ県のサンティアゴ・デ・コンポステーラ市である。面積 29574.4 km²、人口 269.6 万人（2021 年）である。ポルトガル、アストゥリアス州、カスティーリャ・イ・レオン州レオン県と接する。



畠中昌教氏 2022 年 7 月 8 日



ガリシア州の地理的特徴としては、複雑な地形、集落の散村形態、零細土地所有（ミニフンディオ）などがあげられ、独特の景観を有している。バスク州、カタルーニャ州と共に歴史的自治州と位置づけられ、大幅な自治権を持ち、独自の言語・文化を有する。州公用語は、カスティーリャ語とガリシア語の2言語である。一方で、政治的には穏健保守的であり、カタルーニャ州やバスク州の地域主義（ナショナリズム）のように自決権や分離独立を求める動きはあまり大きくはない。しかし、ガリシアにおける地域主義の動きは、19世紀から現在まで盛衰あるものの存在し続けている。

ガリシア州のツーリズム

ガリシア州は、イベリア半島の北西端に位置し大西洋に面した地域である。ガリシア州の位置は、同州の自然状態、人々の生活、景観に深く影響している。気候は湿潤かつ穏やかであるため、落葉樹を主体とする植物の成長に好ましい環境である。この地域では古くから人類が活動してきたため、当初の植生の多くは牧草地、畑、集落などに改変され消滅した。このような人々の働きかけにより、ガリシア州の景観は複雑なモザイク状を呈している。この風景の中に現れる濃淡のある緑こそが、ガリシア州の視覚的象徴であり主なアイデンティティにもなっている。ガリシア州には、大西洋の青い海に面して、変化に富んだ海岸線が伸びている。荒波が打ち寄せる断崖絶壁、広々とした浜辺、そしてこの地域の特徴的な地形である入り江（リアス）がみられ、魚貝類が豊富に生息する。このように、ガリシア州には海と山、そして農村と都市という2つの対照的な景観が存在する。農村部集落や都市の色合いは、スペイン南部の「白い村」とは異なり、この地の気候や建材を反映して、白、灰、緑、オレンジ、黒と多様である。このような自然環境、景観、文化などを活かした多様なツーリズム対象地がガリシア州に存在する。この地域の特徴あるツーリズムの類型は、色に例えると「緑・青・灰」となるであろう。



第1に、「緑」が示すのは農村とワイン・美食である。農村部に滞在する農村ツーリズムも盛んであり、邸宅を改装した宿泊施設に人気がある。また、農牧畜業、漁業が盛んであったことから、それぞれの地域の食材、ワインやリキュールを魅力としたワイン・美食ツーリズムが盛んである。

例えば、ワイン、チーズ、牡蠣、ムール貝などがあげられ、ワインや食材をテーマにした祭も少なくないⁱ。また、ガリシア州の居酒屋や祭でよく食べるのが、タコとジャガイモを茹でて、岩塩、パブリカ、オリーブオイルをかけたガリシア風タコ pulpo a feira である。



図 死の海岸 Costa da Morte

出典：筆者撮影 2013 年

第2に、「青」が示すのは、海岸と温泉である。ガリシア州は全般的に雨が多いため、地中海沿岸のような大規模海岸リゾートはほとんど形成されなかった。北部海岸は「死の海岸 Costa da Morte」と呼ばれ、険しい地形に荒波が打ち寄せる、独特の景観が魅力ともなっている。一方で、南部海岸はリアス・バイシャスと呼ばれ、入江（リアス）が多く、波も静かで砂浜も多く、風景も美しいⁱⁱ。ガリシア州は火山帯ではないものの、断層や花崗岩地帯では古くから温泉が湧出しており、中にはローマ時代に利用されたものもあるⁱⁱⁱ。

ⁱ ポンテベドラ県のカンバードスは、原産地呼称 DO リアス・バイシャスのフレッシュな白ワインと魚介類で有名である。

ⁱⁱ アロウサ湾ではホタテ貝やムール貝など魚介類の養殖業が行われ、夏季には避暑客が多く訪れる。

ⁱⁱⁱ ミーニョ川に面して県都でもあるオウレンセ市は、ミーニョ川沿いなどに温泉源泉が湧出する温泉都市である。また、ポンテベドラ県のモンダリスも 19 世紀には温泉地として開発され、現在でも温泉として利用されるほか、ミネラルウォーターの生産も行われる。



図 ポンテベドラ市旧市街

出典：筆者撮影 2013 年

第3に、「灰」が示すのは、都市・文化と宗教・聖地巡礼である。ガリシア州4県の県庁所在地、州都サンティアゴ・デ・コンポステーラは、それぞれ特徴のある景観や文化遺産を有している。歴史地区の伝統的建造物のファサードは修復され、街路は歩行者道路化されていることが多く、それぞれが特徴ある文化遺産、都市景観を活かした都市・文化ツーリズムを行っている^{iv}。また、都市部・農村部にはケルト時代の集落跡カストロ castro、ローマ時代の城壁や街道などが発掘・整備され歴史遺産として見学可能である^v。ガリシ

ア州にはそれぞれの自治体に守護聖人の祭があり、多数のイベントがあり賑わいをみせる。また、カーニバル、聖週間、夏至のサン・ショアン、クリスマスなどキリスト教に関係する祭も少なくない。サンティアゴの巡礼路は、サンティアゴ・デ・コンポステーラを目的地とするため、ガリシア州内に多くの巡礼路・巡礼宿などが存在し、宗教ツーリズムも一定の重要性を持つ。

ガリシア州の温泉

スペインでは、ローマ時代より温泉が浴場などに利用され遺跡として残っている。その後、イスラム教徒支配下でも温泉は利用されたものの、レコンキスタ以降、一旦温泉利用は衰退した。19世紀から20世紀前半になると医療とレジャー（ツーリズム）を目的とした温泉利用が活発になったものの、スペイン内戦とフランコ政権下の国際的な孤立により荒廃した温泉も少なくなかった。その後、スペインは民主化を経験し、経済水準が上昇したこと、1998年より年金生活者の温泉利用に対する社会保険制度 **IMSERSO** 適用が開始されたことから、温泉利用は増加し、温泉地の経済・インフラ状態も改善された。近年、スペインにおいては美容・健康ブームやストレス増大を反映して、温泉は再評価されている。

スペイン国内における温泉・鉱泉の分布をみると、アンダルシア州、カタルーニャ州、ガリシア州、カンタブリア州、バスク州が多い。その中で、ガリシア州は、温泉湧出量が多く、スペイン唯一の温泉見本市を開催するオウレンセ市を有する。

^{iv} 州南西部ポンテベドラ県の県都ポンテベドラ市は、旧市街の石造りの街並みが修復され昔の面影を残している。

^v 州北東部ルーゴ県の県都ルーゴ市はローマ時代の城壁に囲まれ世界文化遺産に指定され、城壁の上を歩くことができる。ミーニョ川河口のアグアルダ市サンタトレガ山上には、大西洋を望む斜面に大規模なカストロが広がっている。



図 オウレンセ市の露天風呂とミーニョ川

出典：筆者撮影 2013 年

オウレンセ市はガリシア州オウレンセ県の県都であり、オウレンセ低地の上にオウレンセの市街地が広がる。第3次産業が全就業者の75%を占め、行政サービス、商業などが重要である。面積は85.2 km²、人口約10.5万人（2021年）である。オウレンセ市の主要な観光資源は、温泉、河川、歴史的地区の景観、散歩道、ファッションである。市内に11の源泉があり、一日あたりの総湧出量はおおよそ300万リットルで、摂氏65度

以上の高温源泉も少なくない。また、市内を流れるミーニョ川沿いは、湧出する源泉を利用した露天風呂が整備され、憩いの場となっており、さらに親水空間、都市内緑地としての役割もある。

一方、ポルトガルとの国境近くの中山間地域ロビオス市には、温泉プールを備えた温泉施設と、川沿いに湧き出る温泉源泉を利用した露天風呂が点在し、地域住民や観光客が比較的自由に利用している。さらに、ロビオス市から山を越えてポルトガル側に入るとジェレス温泉に出るが、後者の温泉運用形態は厳格で対照的である。

サンティアゴ・デ・コンポステーラ市と巡礼路

サンティアゴ巡礼の終点であるサンティアゴ・デ・コンポステーラ市は、文化、観光、行政、大学といった要素も有する都市であり、中心と周辺では機能や景観が対照的である。中心部であるサンティアゴ大聖堂近辺の歴史的地区では石造りの伝統的建造物が多く、文化施設、大学、観光客向け飲食店などが多く見られる。一方で、20世紀後半以降に開発された周辺部にあたる州政府庁舎、バス駅、ショッピングモールなどでは、金属・ガラス・コンクリートなどを使った近代的な建物が主体であり、行政・商業施設、交通ターミナルなどがみられ、観光客向けの要素は少ない。面積は220 km²、人口約9.8万人（2021年）である。

キリスト教カトリックの3大聖地の1つであるサンティアゴ・デ・コンポステーラ市を終点としてヨーロッパ各地から行われる巡礼がサンティアゴ巡礼である。サンティアゴ巡礼の巡礼路は、ヨーロッパ全域から終点に向かって収束するように広がっている。主要な巡礼路は、フランスからピレネー山脈を超え、メセタ北部を通ってサンティアゴ・デ・コンポステーラに至る「フランス人の道」である。

中世に盛んであったサンティアゴ巡礼は、近代に一度衰退するものの、1970 年代ごろには復活し、1990 年代以降参加者は一貫して増加した。2010 年代には参加者が数十万人に達し、聖ヤコブ大祭年 Año Xacobeo にあたると参加者はさらに倍増する。近年の参加者は世界百数十カ国におよび、欧米からの参加が多い。一方で、20 世紀後半以降のサンティアゴ巡礼に関して、徒歩巡礼において参加動機が多様化しており、純粋な宗教的理由から徒歩巡礼を行っているものは一部とされる。この現象をどうとらえるか人文社会科学を中心に研究が行われ議論が続いている。



図 サンティアゴ・デ・コンポステーラ市の大聖堂前広場

出典：筆者撮影 2013 年

巡礼と学問の町で暮らす

サンティアゴ・デ・コンポステーラ市に住んでみたことで実感できた体験も少なくない。巡礼・ツーリズム・世界遺産の共存、中心部のレジャー化・観光地化による地域社会への負の影響、都市景観に配慮のない大規模開発計画と反対運動などである。大学院生としての日常生活については、大学キャンパス、広場、カフェ、公設小売市場などが思い出の場所である。また、大学院の授業で使う言語にガリシア語が多く、外国人向けガリシア語初級コースを受講したこと、同級生に誘われてデモに参加したことなども強く印象に残っている。

謝辞：本稿は、2012-13 年の久留米大学経済学部在外研究による成果の一部である。客員研究員として受け入れていただいたサンティアゴ・デ・コンポステーラ大学附属研究所 IDEGA の先生方、また現地滞在中にお世話になった皆様にお礼申し上げます。本稿を、2020 年に亡くなられたガリシア日本協会元会長の塩澤恵さんに捧げます。

公開講座

2022 年 6 月 8 日（水） マルチメディアホール（中継） & オンライン

フラメンコ、一流ホテル、どら焼き ―人生の変遷は続く！―

谷口 麻紀（Cafetería Zocodover 経営者）

（スペイン語学科卒 1990 年）

El flamenco, un hotel de primera categoría, los *dorayakis*:

¡La vida seguirá buscando muchos caminos!

TANIGUCHI, Maki (Dueña de Cafetería Zocodover)

(Graduada del Departamento de Español)

Resumen

Pienso hablar sobre mis experiencias de después de graduarme de la universidad, del largo de mi vida hasta el día de hoy, sobre todo de los temas de la época del hotel, del baile flamenco y del trabajo de la cafetería, contando las anécdotas, porque seguramente estos temas son más interesantes para los estudiantes de KANSAI GAIDAI. También me gustaría hablar sobre los puntos de encanto de España general y sobre todo de Toledo.

確たる将来のビジョンを持たずにいた私は高校卒業後は漠然と絵を描きたいと思っていた。しかし少しばかりデッサン教室に通った程度。あっさり芸大受験に失敗。進路迷子として自宅浪人することになった。ある日勉強の合間に NHK のスペイン語講座を見て、その言葉の響きの美しさを知ってそれがきっかけで関西外大を受験、入学。在学中は友人先輩恩師に恵まれ、新しい世界を発掘する時代だった。その一つが春休みを利用しての一ヶ月のバジャドリッド大学での講習会。



谷口麻紀氏（トレドより中継） 2022 年 6 月 8 日

初めての海外、スペイン。目にする物すべてが面白かった。入国初日のマドリッド泊の夜、ホテルの部屋のテレビでスペイン国営放送の2局しかないことに気付いて驚いた。街に自動販売機は殆んどなく、商店の棚に並んでいる常温の炭酸飲料を買った。週末の旅行を計画して鉄道の駅に行くと切符を買う窓口には長蛇の列。目的地と枚数を告げる以外に会話が弾むのか、お客一人のアテンドが長い。挙げ句係員が休憩の時刻になると情け容赦なく窓口のカーテンを閉めてしまう。予定の列車の出発時刻まで随分余裕があったのに自分たちの番が来た時には既に発車した後だった、そんなこともあった。ヨーロッパの発展したイメージを抱いて訪れたスペインだったが逆に原始的で素朴な印象を受け、それが反って新鮮で苦笑しながら楽しんだものだった。

高校時と同様、大学卒業後についても明確な希望先がなく、そんな時自分ならホテルを目指すという母。語学が活かせて、自分を磨けて尚且つ収入になる。自分の中に「ホテル」の文字が浮かび上がる。大阪を中心に一流ホテルと呼ばれる数社に応募。入社試験の際に人事担当者が「我々はお客様に媚びへつらうのではなく同じ高さに立って正々堂々とサービスを提供する」とおっしゃった。それに感銘を受けて第一希望になった所が内定をくれた。中之島のロイヤルホテル、現在のリーガロイヤルホテルである。

ホテルと言うと第一義的には宿泊施設だがシティホテルにとっては売上の4割。婚礼や各種祝賀会、百貨店の展示会やセミナー等の宴会部門が4割。残りがレストラン、バー等の料飲部門その他という体。商品であるホテルの全体像を把握する為大卒新入社員はコーヒークラス、客室、フロントを順番に回る一年間の現場研修からスタートする。

私が最初に配属されたのはフロント。右も左もわからずあの大きなホテルのカウンターに一日立ち、不慣れと緊張とでむくんだ足を引きずった初日の帰路を覚えている。

ある日一人の女性がフロントに来られいつものエクステンションベッドが入っていないとの苦情。反応の鈍い私に「ジャイアント馬場なんです」。体格が良いことを説明する為の比喻だと受け取った私は声を上げて笑った。女性はいぶかしげに私を見て「とにかく手配を」とおっしゃって去って行かれた。言い残された部屋番号を叩いてみるとご予約元日本プロレスラー協会、ご宿泊者馬場正平様。本物のジャイアント馬場さんだった。自分がどんなホテルに就職したのかを理解していない新入社員の重大失敗だった。

次の配属は客室。ここでの一番印象深い出来事は今上陛下をお迎えした時のことだ。当時皇太子殿下でご成婚前のことだった。ご来阪の折りに宿泊されるお部屋はその階に1室のみという特別室。ご到着の半時間程前だったか、その階のエレベーターの前に同期数名と共に制服姿で待機。イヤホンと無線でご一行のご動向を逐一把握する大阪府警。その秒単位のお仕事にこちらも自ずと緊張する。「渡辺橋通過」「田舎橋通過」「玉江橋通過」「ホテル宴会玄関ご到着」ポイント毎に現在地を確認。直通のエレベーターが上昇を始めると文字通りの秒読み。警察の方の声が途切れた瞬間エレベーターのドアが開き、ホテルの社長、総支配人の先導で私達の前にお姿を現された皇太子殿下。担当課長の部屋係だとの紹介に

非常に静かなお声で「ご苦労様」と一言労ってくださり、ご一行はそのまま特別室の扉の向こうへ。ほんの一瞬のことだったがかけがえのない経験として私の脳裏に焼き付いている。

現場研修の最後はウェイトレス。6時半から23時までクローズタイムなしの約200席のコーヒーハウスでの勤務はかなりハード。キャプテンを筆頭に数人ずつのチームを編成し、その単位で日勤と泊まり勤務が組まれる。体育会系の空気が濃い職場だ。

専門職として高卒、専門学校卒の配属が多かったが、彼らには一種の覚悟のようなものがあった。食事中に気分が悪くなった女の子の前に膝まずき、制服のエプロンを広げて「ここに吐いてください」と呈したという先輩の伝説。ホテルが提供するサービスのエッセンス、それを学ぶ重要な機会だった。

その後婚礼セールスに異動。ホテルにとって比重の大きな宴会部門の中でも婚礼は特に重要なマーケット。その強化の為にできたチームの一員として挙式、披露宴を検討されるお客様をアテンドする。挙式後お嫁さんの愚痴をこぼしに来られる新郎母。披露宴の打ち合わせの席で卓上花を赤にするか白にするかで深刻な口論になる二人。婚礼の現場は映画さながらのドラマの連続だ。こんなことがあった。問い合わせにご来館されアンケート用紙に住所氏名を残された新郎母。セールス担当の私のご自宅を訪問するもお留守で簡単な手紙を残して退去。実はその時別のホテルで挙式、披露宴の申し込み手続きをされていた。帰宅後私の置き手紙を大層喜ばれ先の申し込み金を不意にして取り消しこちらに予約を入れ直してくださった。嬉しかった。しかしこのご両家は問題を抱えていた。新婦側がこのご縁を認めていられなかった。チャペルでの挙式当日、新婦のバーজনロードの介添えに新婦側親族で唯一新婦父がご参列。その後披露宴が始まる頃には一人控え室に戻られ泣いていられちゃった。宴終了後、手配担当の同僚と新郎新婦と4人で泣きながら挨拶。このご両家にその後和解があったらうかと今でも時々思い出す。

数々のドラマと共に奔走した10年間のホテル勤務に終止符を打ち、結婚の為渡西。トレドでカフェテリアを経営する夫を手伝うことに。話は前後するが大学時代にセビージャで見たフラメンコに衝撃を受け「私も踊る！」とプロを夢見て西三荘のスタジオに約11年通った。結婚後マドリッドの稽古場に通ったが結果的には自分の能力の限界を知り1年程で諦めた。カルロス・サウラ監督の映画『カルメン』。主人公アントニオ・ガデスが友人のギタリスト、パコ・デ・ルシアと共に自分の舞踊団でカルメン役を演じる踊り手をスカウトすべくある稽古場を訪れるシーンがある。生徒達がカスタネットを手に基本練習をするレッスン風景。そこに映る幼い男の子。これが後の私の先生だったとは！5000ペセタのエキストラ出演料をもらって嬉しかったと稽古中に話してくれた。

店では朝から夜中まで動きっぱなし。改装、義母の他界。いろいろあったがどうにかやって来た20年。ここでコロナ禍が。外出制限が解除された後も街はひっそり。飲食業協会主催で州政府の業界に対する規制緩和等を求めるデモ行進に生まれて初めてプラカードを掲げて参加した。その後少しずつ客足が戻り始めたものの、テーブルとカウンター合計23

席の極小店が生き延びる為には何か活気を与える物が必要。そこで思い付いたのがどら焼。日本をアピールしたかった。『ドラえもん』のお蔭でこれが意外に有名。抹茶やあんこ等毎週楽しみに買いに来てくれる常連客もできた。日本文化に憧れを抱くスペイン人達が私に、そして私のどら焼に「ひとかけらの日本」を求めて足を運んでくれる。スペイン的で在らねばと自分に無理を強いて来た二十余年。気が付くと頭を下げてお礼を言う私。途端に肩の力が抜ける。販売開始からまもなく2年。店を救うつもりで手掛けたどら焼作りは結果的には自分自身を救うことになった。

店の常連客にはいろんな人がいる。警察、神父、片腕の無い人。麻薬中毒から抜け出し一匹の犬と生きるイタリア人ホームレスも。彼がある日涙で顔をくしゃくしゃにして私に話す。生活の為に寄付を募る箱に小銭を入れた7歳の女の子が彼を抱きしめてくれたと。感動で殆んど声にならない。この小さな事がどれだけ自分を幸せにしたかと。料理や飲料を提供するだけの仕事に見える。しかし来店する一人一人の問題に寄り添い、彼らから何かを学び彼らと共に何かを克服する。それがこの仕事の本当の存在意義であり難しさであると思う。



谷口麻紀氏

さて私の住むトレド。テルエルを源にポルトガルを貫いて大西洋に流れ出る、全長1007km、イベリア半島最長の川、タホ。マドリッドの南西約70km、この川がひの字を描くそのくぼみの中がトレド旧市街。ローマ勢力下の半島を支配した西ゴート族がトレドを首都に。約200年後今度はイスラム勢力が征服し、更に後にキリスト教勢力が再征服。公衆浴場等のローマ遺跡を始めユダヤ、キリスト、イスラムの3文化が混在する見所溢れるこの街は1986年ユネスコの世界遺産に認定。13世紀の着工から250年以上かけて完成された大聖堂はカトリック大本山。9世紀のビスグラ旧門、13世紀の太陽門等威風堂々たる数多くの門。街の中心ソコドベール広場の近くにはギネスブック認定の「世界一小さな窓」。16世紀の画家エル・グレコが長く住み多くの作品を残したことは特に有名だ。近郊の村に歴史テーマパークのPuy du Fou。コロンブスの新大陸発見やエル・シッドの物語等を劇場スタイルで見られる。一味違うトレドの楽しみ方だ。スペインにお越しの際は是非トレドを訪れて頂きたい。坂の石畳を歩き疲れたらうちのどら焼で一休みを！



中継でスクリーンに映されたどら焼き

2022年6月8日

第 15 回スペイン語教授法研究会

ENCUENTRO ONLINE

2 de julio de 2022, sábado

De la investigación a la docencia: reflexiones sobre el diseño de actividades

MÉNDEZ SANTOS, María del Carmen (Universidad de Alicante)



Decimoquinta reunión de investigación sobre la didáctica del español

關西外大
KANSAI SAIGAI UNIVERSITY

De la investigación a la docencia: reflexiones sobre el diseño de actividades

 **María del Carmen Méndez Santos**
Universidad de Alicante

Diseñar tareas es algo que todo el profesorado enfrenta en algún momento de su carrera profesional. Planteamos este taller con el fin de conocer los fundamentos teóricos que explican las diferentes formas de diseñar actividades y también reflexiones prácticas sobre cómo hacerlo. Para ello introduciremos conceptos como tarea/actividad; factores individuales cognitivos, motivacionales, afectivos, sociales y culturales y otras cuestiones como la personalidad del alumnado. Todo ello con el fin de ofrecer una reflexión teórica y práctica sobre cómo diseñar actividades lo más eficaces posibles.

2 de julio de 2022 (sábado)
15:00-17:00, Japón
Via Zoom

Inscripción: <http://bit.ly/3KFS0Uk>
Contacto: pea-vig@univ-guelph.ca



Cartel del encuentro online

Si bien es sabido que el aprendizaje natural produce una mayor reestructuración a nivel cognitivo (Magnan y Lafford, 2013; Yang 2016), no siempre se dan las condiciones necesarias para que este se produzca. Entonces, el aprendizaje formal se convierte en la opción para el aprendizaje de lenguas extranjeras. Para ello no hay un método mejor que otro, pero sí más adecuado según las circunstancias y el contexto inmediato, lo que se ha venido a llamar el “posmétodo”.

En este contexto, a menudo **el profesorado diseña sus propios materiales** con varios objetivos: para ampliar el input que se ofrece en clase, para acercar a los alumnos a más muestras reales de lengua, para consolidar conocimientos que se han dado en el aula, para motivarles, para estar en contacto con ellos, para estimular su creatividad, para poder introducir más cantidad o diversidad de temas que no hay tiempo de ver en clase, para ayudar a los alumnos ausentes a estar conectados, para conseguir un aprendizaje más significativo, para introducir más variedad de actividades, etc. Pero ¿qué inconvenientes o defectos tienen esos materiales? A menudo se da una falta de consistencia o de coherencia, errores instruccionales provocados, estereotipación, falta de conocimiento de la norma, etnocentrismo, falta de compensación entre destrezas o falta de adecuación al nivel.

El objetivo de esta presentación es dar algunas de las directrices y recomendaciones para diseñar materiales más adecuados, considerando que **todos los factores implicados en el aprendizaje han de ser contemplados durante el diseño de las actividades para lograr un aprendizaje lo más exitoso posible**. A continuación, se resumen brevemente las recomendaciones dadas:

1. **Seleccionar:** hay que tener en cuenta que la atención es limitada y selectiva. A menudo el alumnado está sobrecargado y no puede prestar atención a todo. Los aprendices están expuestos a más input del que pueden procesar.
2. **Dirigir la atención** (noticing): como señala Ellis (2018): “Even if learners do notice the target feature, they may not acquire it. Noticing affects intake but not everything that is taken into working memory passes into long term memory”.
3. **El input:** hay que asegurarse de que hay suficiente input (hipótesis del input de Krashen, 1982).

4. **El output:** de igual manera, hay que asegurarse de que hay suficiente output (hipótesis del output Swain, 1985)
5. **La neuroplasticidad:** según el modelo de la memoria declarativa/procedimental de Ullman (2004), pueden ser útiles técnicas como el mindfulness, la música, la poesía, los dibujos o las manualidades.
6. **Adecuarse al nivel activo y perceptivo:** se puede ofrecer tareas progresivas o se puede dar la posibilidad de elegir la que les guste más o se adecue a su estilo.
7. **La distribución del tiempo:** es importante tener en cuenta la curva de la atención (Figura 1): la nueva información debe presentarse al principio de la clase, porque es más probable que sea recordada, reservándose la práctica para el segmento central. El cierre es también un momento en el que se produce alta retención.

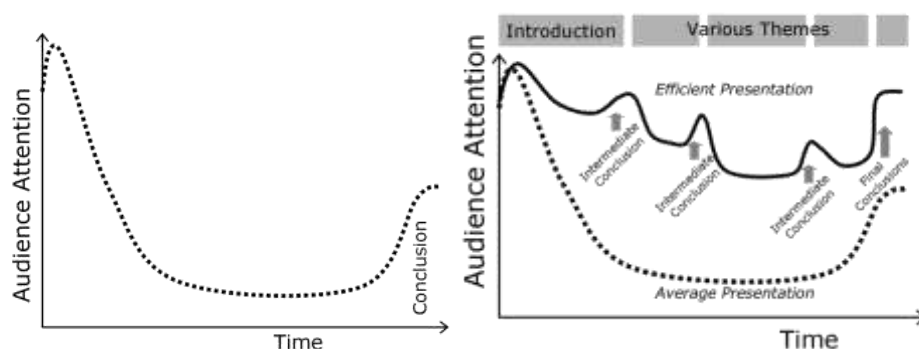


Figura 1: curva de la atención

8. **Presentar un desafío moderado:** tiene que haber un desafío cognitivo motivante, pero sin ser intimidante. Si la tarea presenta una alta dificultad, es conveniente ofrecer un modelo previo antes de pedirles un uso activo libre no dirigido.

9. **Tener en cuenta la utilidad:** es beneficioso explicar al alumnado la razón por la que se hace una actividad, explicar cuál es su relación con los contenidos previos estudiados y con los futuros. Esto le ayudará a conectar el aprendizaje.
10. **La importancia de la variedad:** debe de haber variedad de actividades: memorización, comprensión, aplicación, de reacción y respuesta, de evaluación, de resolución de problemas, de presentación.
11. **Reciclar y consolidar:** es recomendable conectar el aprendizaje relacionando contenidos previos y trayéndolos a la clase cuando sea posible (¿recordáis...? / esto también es útil cuando...). Al comienzo de la clase se pueden fijar en el encerado los objetivos del día. Al finalizarla todos pueden recordar qué han visto y si se han cumplido.
12. **El formato y el diseño:** un diseño atractivo, colorido, con imágenes, con un *input* interesante o sorprendente o que rompa la monotonía del manual. Es conviene emplear todos los formatos disponibles: presentación, práctica controlada, práctica libre, comprobación, práctica adicional...
13. **La retroalimentación:** es fundamental para comprender mejor y reorganizar los paradigmas creados. Debemos resaltar tanto los errores como los aciertos.
14. **La tecnología:** puede ser llamativa, romper con la monotonía, puede ofrecer contextos o recursos que no podemos hacer de otro modo, siempre que tenga un objetivo claro y que sea una herramienta más, no un objetivo en sí misma.
15. **La relevancia personal:** podemos llevar a clase actividades en las que conecten con su experiencia personal pasada o presente, pero sin exponer demasiado su intimidad, que ellos puedan elegir qué contar o qué no.

16. **La creatividad:** si al menos una vez en cada sesión ofrecemos la posibilidad de que cada alumno use su imaginación y creatividad, fomentaremos su implicación activa: dejando abiertas actividades que deban continuar o imaginar qué pasa, qué dicen; creando sus propios materiales, etc.
17. **El conocimiento mutuo:** se puede fomentar procurando que encuentren puntos en común de interés, buscar que se cambien de asiento, el profesor puede usar un ritual de aula para hacerles sentir filiación como usar frecuentemente una frase para comenzar y acabar o, por ejemplo, usar unos minutos para hacer charla distendida al comienzo mientras todos llegan y se organizan.



Figura 2: etapas en la formación de un grupo.

18. **Una atmósfera protectora:** en una zona de seguridad, el alumnado toma más riesgos y tiene mayor tolerancia a la ambigüedad, una menor ansiedad está relacionada con una mayor captación de input y mayor producción de output y una mayor confianza produce más autoestima, sentimiento de filiación y mayor disfrute de la experiencia de aprendizaje.
19. **No crear sentimientos negativos.**

20. **Fomentar sentimientos positivos:** hay que tener en cuenta que, como señala Ehrman (2000) el aprendizaje de idiomas para un uso real y comunicativo es un compromiso global de la persona que supone una exigencia extrema.
21. **Entrenar estrategias** de aprendizaje, de producción y de comunicación.
22. **Intercultural e inclusivo:** también es importante que en la actividad no se creen estereotipos, que represente la diversidad y promueva el conocimiento intercultural.
23. **Competencia crítica.**

BIBLIOGRAFÍA:

- Ehrman, M. E. y Dornyei, Z. (1998), *Interpersonal Dynamics in Second Language Education: The Visible and Invisible Classroom*, Thousand Oaks.
- Ehrman, M. E. (2000). Affect, cognition, and learner self-regulation in second language learning. En O. Kagan and B. Rifkin (eds)., *The learning and teaching of Slavic languages and cultures: Toward the 21st century* (109-133). Bloomington.
- Ellis, R. (2018), *Reflections on Task-Based Language Teaching*, Multilingual Matters Ltd.
- Krashen, D. (1982), *Principles and practice in second language acquisition*, Oxford Pergamon Press.
- Magnan, S. Y Lafford, B. (2013). Learning through immersion during study abroad. En *The Routledge Handbook of Second Language Acquisition*, Routledge.

Swain, M. (1985), Communicative competence: Some roles of comprehensible input and comprehensible output in its development. En Gass, S. and Madden, C. (eds.). *Input in second language acquisition* (pp. 235-253). Rowley, Mass: Newbury House.

Ullman, MT. (2004), Contributions of memory circuits to language: the declarative/procedural model. En *Cognition*. 92: 231-70.

Yang, J.S. (2016), The effectiveness of study-abroad on second language learning: A meta-analysis. En *Canadian Modern Language Review*, 72.1, 66-94.

要約

研究から教育へ ―アクティビティデザインに関する考察― メンデズ・サントス, マリア・デル・カルメン (アリカンテ大学)

外国語を学習する際、母国語を習得するのと同様の環境や条件が確保されるわけではない。学習者の環境に応じた、より適切なメソッドを選択する必要がある。授業でのアクティビティをデザインすることは、教員にとって避けられないことであり、最も効果的な学びを得るためには、アクティビティデザインの段階で、様々な角度から学びに関わる要素が検討されなければならない。このオンライン研究会では、アクティビティデザインの理論的な基礎を確認し、実際の授業にどのように取り入れていけば良いのか、23の要点が示された。(発表要約：砂原由美)

連続公開講座
南米音楽紀行（全3回）

第1回
2022年10月18日（火） マルチメディアホール & オンライン

国境なきブラジル音楽

エジソン・マイサト（歌手）

Música brasileira sem fronteira

Edison MAISATTO (Singer)

ブラジル音楽のボサノバを紹介しました／イベロアメリカ研究センター公開講座

イベロアメリカ研究センターが開く 2022 年度の連続公開講座が 10 月 18 日に始まりました。今年度のテーマは「南米音楽紀行」。

この日は第1回で、歌手のエジソン・マイサトさんが「国境なきブラジル音楽」をテーマにボサノバを紹介しました。マイサトさんは、ブラジル音楽を日本に伝え音楽を通じて幸せを与えたい思いで 22 年前に来日しました。現在、愛知県を中心に学校や企業のイベントを利用してブラジル音楽の普及に励んでいます。



エジソン・マイサト氏

2022年10月18日

マイサトさんは講義で、日本で人気を集めているボサノバを 14 曲披露しました。ボサノバは、ジャズとサンバのリズムが混ざりあった音楽ジャンルの 1 つであり、ギターで演奏しながら歌うのが一般的です。バンドと組み合わせる場合もあります。マイサトさんは、ロマンチックで穏やかな曲からサンバ調のリズミカルな曲まで披露しました。



1 時間にわたり 14 曲を歌いました 2022 年 10 月 18 日

後半には質問時間が設けられ、会場からはたくさんの質問が寄せられました。好きなボサノバ音楽の曲を聞かれると「1 つには選べませんが、ボサノバのリズム、曲、歌詞が大好きです」と話しました。また音楽活動を通して「日本にボサノバを通じて幸せを与えたい思いで来日しましたが、自分が歌うことで感動を与えられて自分自身も幸せになりました」と微笑みました。



参加者からの質問に 1 つ 1 つ丁寧に答えました 2022 年 10 月 18 日

(関西外大ホームページのレポートより転載)

<https://www.kansai-gaidai.ac.jp/news/detail/?id=1599&cat=2&u=2>

第2回

2022年11月11日（金） マルチメディアホール & オンライン

アルパとともに半世紀

ルシア塩満（音楽家）

Medio siglo con el arpa paraguaya

Lucía SHIOMITSU (Música)

要旨

幼い頃に移住者としてパラグアイへ渡った。移住地での生活では為にならないという父の判断でひとりアスンシオンへ行き生活するようになったことがきっかけでアルパを知ることになった。移住生活は短かったが、帰国直前に出会った、後の恩師となる人物を頼ってその後幾度かのアルパ留学を重ねる。恩師クリスティーノ・バエス・モンヘス Cristino Báez Monges に出会えたことはその後の私の運命を大きく左右したと言っても過言ではない。伝統派といわれるアルパ奏者から直接習得した奏法を守り抜いて 47 年。パラグアイでの生活を交えながらお伝え出来たらと思う。



イグアス移住地で琴を弾く私

私がアルパと出会ったきっかけはパラグアイへの農業移住

南米では西洋人によってもたらされた小型のハーブが各国で土着化して特有の発展をしていた。私が小学４年生のときパラグアイへ行ったのは一家での農業移住だったのでアルパとは全く関係なかった。そのときはパラグアイとはどんな国なのか、農業をしたことがない人間が農業移住者として行くということはどういうことなのか、私には理解できないことだった。

神戸港を後にした移住船は約１か月半の長旅を終えてアルゼンチンのブエノスアイレス港に着いた。その後汽車で２日かけてパラグアイとの国境の町へ向かい、ようやくパラグアイの地、エンカルナシオン市に足を踏み入れたが、移住地へはここから首都アスンシオンまで 350 キロメートル、さらにイグアス移住地まで 300 キロメートルのバス移動という過酷な旅が待ち構えていた。

新規入植者には 30 ヘクタールの土地が与えられる。土地といっても名ばかりで、そこは熱帯の樹木が生い茂るジャングルといったほうが正しかっただろう。私たちはまずは生活するための家を建てる場所と農作業ができる土地を開墾することから始めなければならなかった。現地の日雇い人夫を雇って直径 1 メートルはあろうかという大木を斧で切り倒す。現地の人夫は 1 本切り倒すたびに喚声を上げ一休み、そして再び伐採作業を始めるという繰り返して開墾作業はなかなかはかどらなかったが、それと同時に生活水の確保のために井戸を掘らなければならなかった。農地の開墾と同様、これも手作業で直径 1 メートル 20 センチほどの穴をただひたすら掘り進める。毎朝、火のついたロウソクを掘った穴の中におろしてその火が消えないことを確認して、兄二人（17 才と 14 才）が交代で掘り進めた。私たちが入植したイグアス移住地は良い水脈があるとは聞いていたが、何メートル掘り下げれば水脈に当たるかは分からなかったが、運よく 18 メートル掘ったところで掘り当てることができた。その井戸は未だに枯れることがないと聞いているが、兄に井戸掘りのことを訊いてみると「あの時は怖かったなあ。深くなればなるほど上の穴は小さくなっていくし、だんだん心細くなっていくんだよ」。

移住地での生活もようやく落ち着いてきたある時、父が「百合子、お前をこんな苦勞をさせるためにパラグアイへ連れてきたんじゃない。お前はアスンシオンへ行って勉強してきなさい」と言い出した。下宿先は日本人が営んでいる八百屋『岩崎商店』だった。そこで店の手伝いをしながら学校へ通わせてもらうことになったが、八百屋の仕事は朝がとても早い。日本人の移住地から野菜や果物を積んだトラックがやってくると何時であろうと起こされて荷下ろしの作業も手伝わなければならない。午前中店番をして昼食をとり、シエスタ（昼寝の時間）に学校へ行く。学校から帰るとまた店番をする。その繰り返しがしばらく続いたある日、先生が「あなたはどのようにして授業中に寝ているの？」と訊かれたことがあって事情を話すとそれきり訊いてくることはなかった。八百屋では店番をして、計算が早い子として人気者にもなった。ときには万引きしそうなお婆さんと口論になったりし

て、そんな日常の会話からスペイン語を学べたのは自分にとって良い経験だったと思う。

親元を離れたアスンシオンでの生活は約2年続いたがイグアス移住地へ帰ることになった。アスンシオンは娯楽や音楽にあふれた楽しい都会であったが、やっぱり親と一緒に生活することに勝るものはないと感じた。

このころになると農業生活にも慣れてきて収穫したものを町へ出荷できるようになったが、それが収入に結び付くような収穫にはなかなかならなかった。そんな慣れない移住地生活に無理が重なったのか父が病に倒れてしまい、塩満家はこれが潮時と考えて移住を諦めて帰国することにした。

クリスティーノ・バエス・モンヘスとの偶然の出会い

帰国が数日後に迫ったある日、父がパラグアイの思い出にアルパを買って帰ろうと言いつ出した。私が丁稚奉公していたころはラジオから流れる音楽といえば主にパラグアイ音楽で、ただただ賑やかでうるさい音楽としか聞こえなかったし、アルパには興味もなかった。アルパの購入を友人に相談すると、とある店に連れて行ってくれた。私がアルパやパラグアイ音楽に少しでも関心を持っていれば、その店主が誰だったか気づいていたはずだ。そこはパラグアイ・アルパ界の名手、クリスティーノ・バエス・モンヘスが営む店だった。クリスティーノはいつからでも教えるよと言ってくれたが、あと2〜3日で日本へ帰らなければならぬことを伝えると目の前で数曲弾いて聴かせてくれて、私は初めて聴く生のアルパ音色、響きの虜になってしまった。帰る間際にクリスティーノは日本へ帰ったあとでもアルパを演奏する気があれば私を訪ねていらっしゃいと優しく声をかけてくれた。

たった1度聴いただけなのにクリスティーノの生の音の迫力を忘れられないまま帰国してしまった私はまず日本でアルパ奏者を探してみたが見つからない。アイリッシュハーブの教室があったので入ってみたが、パラグアイのリズム、音色とは違っている。そうこうしているうち父が日本に“チョコ本間”というアルパ奏者がいることを見つけた。ロス・インディオスというグループのメンバーだった人で私の日本での恩師になる人だった。その当時高校生だった私はセーラー服のままホテルの裏口から楽屋へ入ってしばらくレッスンを受けていたが、クリスティーノの「またパラグアイへいらっしゃい」という優しい一言が忘れられずに、それを頼りにパラグアイへアルパ留学することになった。留学といっても私は生活費を自分で稼ぐということで親の許可を受けていたので1日8時間労働で日本航空の代理店に籍を置いていた。普通の会社員の生活をしていただけで、クリスティーノのレッスンを受けるにはシエスタという昼休みの時間帯を利用するしかなかったのがつらかった。これはクリスティーノだって同じことだったに違いない。

レッスンを1年ほど続いた頃、私は体調を崩してしまった。親に相談すると日本で検査することになり、レッスンよりつらい入院生活を送ることになった。

ようやく体調が回復した私は「第1回川俣コスキンフェスティバル」に出演し、それを

機に『中南米音楽』という雑誌社に入社して身につけたスペイン語を活かし、招聘したミュージシャンの通訳など南米音楽にとっぷり浸る生活に入った。しばらくの間、昼は会社員、夜はときどきライブレストランでのアルパ演奏という二足のわらじを履く生活が続いたが、アルパ奏者として一人前になるという夢は捨てきれず、会社を辞めて、1980年に当時レコード会社に勤めていた主人と結婚し、1984年、二人でパラグアイに渡りクリスティーノと他の二人の先生の下でみっちりアルパ習得に励むことにした。1984年のこの1年間、私はクリスティーノからパラグアイ音楽の基礎を厳しく叩き込まれ、私を各地で行われる音楽祭へ連れて行っては、そこでは私のことを《クリスティーノ二世》と呼んでみんなに紹介してくれていた。これは私にとってこれまでにない最高の誉め言葉だった。



クリスティーノ・バエス・モンヘスのトリオと共演する私

レコードを自主制作したのは1982年からで、このデビュー作は1000枚限定盤だったが、日本人として初めて、アルパでパラグアイ音楽を中心に演奏したレコードとして、その珍しさもあって、あっという間に初回生産分は売り切れてしまった。まさかの動きに驚き、パラグアイ音楽ファンがこれほどいることに感動した私は、その後制作費がたまと次々に作品を生み出し、現在までに自主制作として10作品を数えている。自主制作以外では2作品出していてそのうちの1枚、ソニー盤（1994年発売）はその年度に発売されたCDのなかから最優秀録音大賞に選出されている。CD制作やコンサートを通じてパラグアイ音

楽を日本で広めた功績を高く評価されて、日本人のアルパ奏者として初めて 1995 年にパラグアイ政府から『文化功労賞』を、2004 年には『国家功労勲章・コメンダドール位』を拝受する栄誉を得た。

1975 年にプロデビュー以来これまで、アルパー筋に生きぬけたのはクリスティーノの指導のお陰といってよいと思う。恩師からいただいた《クリスティーノ二世》の称号にどこまで近づけているか天国にいるクリスティーノに訊いてみたい。



国家功労勲章の受賞パーティーで



ルシア塩満氏 2022 年 11 月 11 日

第3回

2022年11月24日（木） ICC ホール & オンライン

アルゼンチンタンゴと私

Sayaca（大澤さやか）

（タンゴボーカリスト／企業向けグローバル研修講師）

Argentine Tango and Me

Sayaca（OSAWA, Sayaca）

（Tango vocalist / Instructor of Cross-cultural Courses for Business People）

ABSTRACT

In this lecture, I'll be introducing and explaining the following points. I hope you can learn and feel something new about tango, and enjoy the live performance as well.

- Brief history of Tango
- Buenos Aires, the city where Tango was born
- Tango as music
- Tango lyrics / translation
- Why do I sing Tango?
- My life as a singer and a trainer
- How you can integrate Tango into your life
- Live performance by Sayaca



Sayaca 氏

2022年11月24日

「アルゼンチンタンゴ」と言えば、日本では、情熱的、官能的、魅惑的、哀愁漂う、と言った形容詞で表現されることが多い中、本場アルゼンチン、特にブエノスアイレスでは、Una música (一つの音楽)、Un tipo de canción (一つの歌)、Un baile (一つの踊り)、Una forma de vivir (一つの生き方)、Una filosofía (一つの哲学)、Un sentimiento (一つの感情)、Una sensibilidad (一つの繊細さ) などと捉えられ、究極的に言うと、タンゴとは ‘Una seña de identidad de lo argentino = porteño’、つまりアルゼンチン人、特にブエノスアイレス人であることのアイデンティティの証、特徴とも言えます。今回の講演を通して、タンゴを様々な観点から捉えて頂き、それによって情熱的、官能的だけではないタンゴの多面的な魅力を、1人でも多くの方にご理解頂ければ幸いです。

以下講演当日のプログラムより：

- 1 タンゴがどのように生まれたのか
- 2 タンゴが生まれた都市、ブエノスアイレス
- 3 音楽としてのタンゴ
- 4 タンゴの歌詞／訳詞
- 5 なぜタンゴを歌うのか？
- 6 歌手／講師 二刀流の生き方
- 7 タンゴを人生にいかに取り入れるか？
- 8 ライヴ演奏 by Sayaca

1 タンゴがどのように生まれたのか

タンゴは 1870 年～1880 年頃アルゼンチンの首都ブエノスアイレスの場末で生まれたと言われています。当時のヨーロッパからの移民は殆どが男性だったため、フラストレーションの解消の一つ、または娯楽の一つとして、場末の酒場でまずは男性同士で踊り始めたというのがタンゴの始まりで、その後は踊る相手が女性へと変わっていきました。

2 タンゴが生まれた都市、ブエノスアイレス

タンゴが生まれたブエノスアイレスの人口は約 303 万人、ほとんどがイタリア、スペインからの白人系移民で、ヨーロッパ的な建築物の多さにより、南アメリカで最もヨーロッパ的な都市とされ、南米のパリとも呼ばれています。その美しい街には、有名なコロン劇場や市議会、美術館、巨大なサッカー場、オペリスコ（ブエノスアイレスのシンボルの塔）の他、地下鉄 B 線は、東京の古い丸の内線が走っています。こうした建築やデザイン、サッカー、そしてもちろんタンゴで知られるブエノスアイレスには、もう一つ、意外で興味

深い特徴があります。それは精神分析が非常に盛んなことです。実は、ブエノスアイレスは、ニューヨーク、パリと並ぶ「精神分析の都」と呼ばれており、人々の生活の中で‘Terapia’（セラピー）という言葉は良く飛び交い、何か困りごと、悩み事があれば、日本であれば軽い気持ちで占いにいくような感覚で、人々はセラピー＝精神分析に行きます。そして、家族や親しい友人の間で、良いセラピストの情報交換、紹介もよく行われることから、精神分析は、かなりボルテーニョ（ブエノスアイレスの人々）の生活に浸透していると言えます。

ここまで見てきたブエノスアイレスの特徴として、移民が多いことに加え、精神分析が盛んなこと、さらに過去の栄光を忘れられない人々のプライドや美意識が高いこと、そしてヨーロッパに対する憧れとコンプレックスが入り混じる屈折した複雑な思いを持ち合わせていることなどが挙げられるのですが、一般的に日本人がタンゴに対して抱く「情熱的」「官能的」というイメージが覆されるほど、実は、タンゴというのは、人間の持つ、心の精細さ、脆さ、切なさ、やるせなさ、戸惑う心の叫びなど、やりどころのない心のざわめきを表現する、抑圧された感情の代弁とも言えると思われます。

3 音楽としてのタンゴ

タンゴはアルゼンチン、厳密に言えば首都ブエノスアイレスの音楽です。アルゼンチンにはタンゴ以外にも、各地方の先住民（インディオ）の音楽と、民族音楽（フォルクローレ）があり、タンゴはあくまでも都会音楽です。

タンゴは、主にダンスの伴奏曲としてヨーロッパから伝えられたワルツやポルカ、キューバのハバネラ、ウルグアイの黒人音楽カンドンベなどが奏でられ、やがて様々な国の音楽の要素が混じり合いながら、いつしかタンゴやミロンガと呼ばれるようになりました。祖国を捨てアイデンティティーを持たない移民達が多かったブエノスアイレスで、タンゴは唯一「自分たちのもの」として作り出され、この点においても、タンゴはブエノスアイレス人であることの証とも言えます。

1870 年～1880 年頃アルゼンチンの首都ブエノスアイレスの場末で生まれたタンゴは、20 世紀に入ると一般市民にも人気が広がり、第 1 次世界大戦後にはヨーロッパの社交界でももてはやされ、世界的な人気となります。そしてコンチネンタル・タンゴ（ヨーロッパ生まれのタンゴ）もかなり盛んになりました。その後、1930 年前後と 40 年代にタンゴ黄金時代があり、日本では 1950 年代がタンゴブーム、本場アルゼンチンでも高く評価された歌手の藤澤蘭子も活躍しました。80 年代には、アストル・ピアソラの音楽やブロードウェイダンスショー「タンゴ・アルヘンティーノ」が世界的な大ヒット。1990 年代には、日本を代表するバンドネオン奏者小松亮太がデビュー、クラシック界からはチェロのヨー・ヨ

ー・マ、ヴァイオリンのギドン・クレーメルがピアソラ作品を取り上げて話題になりました。2000 年代以降は、ゴタンプロジェクトに代表されるタンゴ・エレクトロニコ、そしてタンゴのグローバル化が進んでいきます。

ここからは、タンゴの音楽について、タンゴのリズム、タンゴの演奏楽器、そしてタンゴの演奏スタイルの 3 つのポイントからみていきましょう。

1) タンゴのリズム（講演日には、タンゴベーシストの田中伸司さんによる、コントラバスでのリズム演奏および解説のビデオを使用しました）

- 2/4 フォー・ビート：これが肥大化して「ジュンッパッ ジュンッパッ」と変わったのが Yumba ジュンバ
- シンコパ（シンコペーション）：ハバネラの変形
- ミロンガ：基本的にはハバネラと同じ
- 3・3・2：例 ‘Libertango’
- スロー・ミロンガ：Milonga Pampeana, Milonga Campera とも言う。例 ‘Milonga triste’, ‘Milonga de ángel’

2) タンゴの演奏楽器

タンゴの初期の頃は、ギター、フルート、クラリネット、ヴァイオリンで演奏されていたのが、現代では、バンドネオン、ピアノ、ヴァイオリン、コントラバスという編成が最も一般的です。さらに、オルケスタ・ティピカ（標準編成オーケストラ）は、バンドネオン ×（最低）3、ヴァイオリン ×（最低）3、ピアノ、コントラバスで構成されています。

次にタンゴ音楽に欠かせないバンドネオンという楽器の特徴とその魅力を見ていきましょう。バンドネオンは、1820 年にドイツで発明され、教会のオルガンが重くて持ち運ぶのに不便なので、その代わりになる楽器として生まれました。なお、タンゴとの出会いは偶然だったようで、1890 年頃にたまたまヨーロッパ航路の船乗りでバンドネオンを弾く者がいたため、アルゼンチンにこの楽器が持ち込まれ、タンゴ音楽との相性が非常に良かったため、その後のタンゴには欠かせない楽器となったそうです。

特にアルゼンチンタンゴで使われるバンドネオンの特徴としては、ドイツ製の「ライニッシュ型」という型であること（大きさ：約 23cm × 24cm × 45cm 重さ：約 6kg ボタン：右手 38 個は高音部、左手 33 個は低音部担当）が挙げられます。また、アコーディオンと比較すると、細長い長方形で、肩にかけるストラップが必要なアコーディオンに対して、バンドネオンは、伸ばすと横長ですが形は長方形ではなく、肩にかけるストラップは必要あ

りません。そして、右手は鍵盤でメロディを、そして伴奏を奏でる左手側のボタンの大半は一つのボタンを押せば和音が自動的に鳴るアコーディオンに対して、バンドネオンは、右手／左手側両方とも一つのボタンを押しても和音が自動的に鳴らず、それどころか、ボタンの音階配列は不規則、さらに、押し引き異音、つまり同じボタンを押していても、蛇腹を内側に押した時と外側に引いた時とで、異なる音が出るという、演奏するのには大変な楽器なのですが、その奥深く優しい音色は、タンゴファンのみならず、聴く人全てを魅了することでしょう。

3) 演奏スタイル

タンゴを演奏する際の譜面は存在するのですが、かなり自由度が高く、究極的には全てはアレンジ次第と言えます（講演日には、有名な‘La cumparsita’（ラ・クンパルシータ）を、フランシスコ・カナロ楽団、ファン・ダリエンソ楽団、カルロス・ディ・サルリ楽団、そしてオスヴァルド・プグリエーセ楽団といった、様々な楽団の演奏で聞き比べてみました）。

4 タンゴの歌詞／訳詞

タンゴの歌詞の魅力と言えは、様々な *Sentimientos*（フィーリング、感情）を取り上げていること、*Lunfardo*（ブエノスアイレスで生まれたスラング、俗語）が使われていることです。タンゴの歌詞は、愛、友情、悩み、裏切り、お酒、母親、故郷など様々な人生のテーマを扱っているのですが、圧倒的に多いのが「女性に振られた男性の泣き言」です。これは、移民＝男性の数が多かったため、1人の女性を巡って必然的に失恋する男性の数が多くなってしまう事実に基づいています。日本では蓋をして隠したくなるような心の痛み、苦しみ、やるせなさなどを含め、様々な *Sentimientos* をテーマにしています。

Lunfardo の例としては、*mango*, *gita*=お金、*mina* =女の子、*pibe*=男の子、*quilombo*=災難、*macana*=困ったこと、*fiaca*=だるさ、*trucho*=偽物などがあり、ブエノスアイレスでは現在でも日常生活でよく耳にします。

4 タンゴの歌詞／訳詞

若い頃よりアルゼンチンタンゴの大ファンであり、関西外大で約 10 年スペイン語の教授をしていた亡き父、大澤寛が遺した約 520 曲のタンゴの訳詞の中から 465 曲を抜粋し、3巻にまとめた訳詞集『アルゼンチンタンゴ 歌の世界へ Vol.1-3』（‘*Bienvenidos al Mundo de las Letras del Tango*’）が昨年 11 月に完成しました。



父が残した訳詞の心得がメモとしてあったので、以下いくつかご紹介します：

- 日本語訳は宿命として冗長になるので、思い切って骨だけにしてみることも必要
- 男唄なのか女唄なのかをはっきりさせること
- 邦訳は日本語でタンゴを歌わせるためではない。そのためには、完全に別世界・別次元の考え方をしなければならない
- 出来る限り自身の邦訳を声に出して読んでみて、自分自身が音読して自分の耳に心地よい爽やかにこなれた日本語であることが肝要

＊ 訳詞集にご興味のある方は「Sayaca タンゴ」で検索した際に出てくる HP に、
又、Facebook ユーザーの方は「Sayaca Tango」に直接ご連絡ください。

5 なぜタンゴを歌うのか？

私にとっては、日本では特に同調圧力や世間体を必要以上に意識することで抑圧される様々な感情、Sentimientos（フィーリング）の代弁ができること、そして素晴らしい師匠、素晴らしいミュージシャンとの Encuentros（出会い）、良いご縁があり、今もなおそれが続いているからです。

6 歌手／講師 二刀流の生き方

異文化理解のフィルターである、仕事優先＝働くために生きるスタイルの「DOING（行動型）」と、ライフスタイル優先＝生きるために働くスタイルの「BEING（状態型）」の比較を紹介。自分の個人的な例では、デビュー当時はタンゴ歌手を続けていくために必要だった講師業というスタイルから、時代の価値観の変化と共に、現在では、タンゴ歌手兼企業向けグローバル研修講師の平行キャリアが可能となったことで、両方を楽しむことができるようになり、良いワークライフバランスを送れていることはありがたいことだと思います。

7 タンゴを人生にいかに取り入れるか？

コロナ、ウクライナ紛争、気候変動、政治、経済、人権問題など、現代のあらゆる問題、世の中の激しい変化に対応するには、個々の「人間力」を高める必要があります、そのためには；

- 1) 他者の意見を受け入れ 自分の意見を言う「コミュニケーション力」
- 2) いかなる事もしなやかに受け止める「柔軟力」
- 3) 様々な立場を考えることができる「想像力」が必要だと考えます。

そして様々な立場、状況の、様々な感情を表現するタンゴは、私達に今のありのままの自分で良いという気持ちをもたらし、Sentimientos（豊かな感情）、Diversidad（多様性）、Libertad（自己開放）といった点からも、現代の悩める私達の人間力を高める良いきっかけになるのでは、と思うのです。

8 ライヴ演奏 by Sayaca

最後に、アルゼンチンタンゴの代表曲 ‘Uno’ を歌いました。

メキシコ・日本芸術文化研究会
Reunión de investigación sobre cultura iberoamericana

21 de octubre de 2022, viernes

**Encuentro de Investigación sobre Cultura Iberoamericana
con el Seminario Permanente de Investigación
de Arte y Cultura México-Japón**
TRONU MONTANÉ, Carla (Universidad Kansai Gaidai)

El 21 de octubre de 2022 el Centro de Estudios Iberoamericanos de Kansai Gaidai celebró una reunión de investigación con el Seminario Permanente de Investigación de Arte y Cultura México-Japón (メキシコ日本芸術文化研究常設セミナー) <http://cenidiap.net/sepiacmj/>. El evento se celebró presencialmente en español y fue un encuentro académico entre este grupo de investigación mexicano y varios profesores del departamento de Estudios Extranjeros de Kansai Gaidai. Las profesoras Miki Yokoigawa 横井川美貴 (Instituto de Artes, Universidad Autónoma del Estado de Hidalgo) y Rie Arimura 有村理恵 (Universidad Nacional Autónoma de México) presentaron su grupo de investigación y su primera publicación conjunta.



横井川教授



有村准教授

El acto comenzó con el saludo de bienvenida de la profesora Michiyo Hayashi 林美智代, directora del Centro de Estudios Iberoamericanos. A continuación, la profesora Yokoigawa presentó el grupo de investigación, un colectivo multidisciplinario que empezó en 2019 con 15 investigadores y actualmente cuenta con 18 especialistas que realizan actividades académicas para fortalecer la investigación y el análisis sobre las artes y la cultura de México y Japón. Está auspiciado por el Centro Nacional de Investigación, Documentación e Información de Artes Plásticas (Cenidiap) del Instituto Nacional de Bellas Artes y Literatura (INBAL) con la participación del Instituto de Artes (IA) de la Universidad Autónoma del Estado de Hidalgo y el Centro Nacional de Investigación, Documentación e Información Teatral Rodolfo Usigli (CITRU) del INBAL. En agosto de 2022 el Seminario organizó el primer Coloquio Internacional de Estudios de Arte y Cultura Iberoamérica-Japón en Morelia y Ciudad de México. En octubre de 2022 algunos de sus miembros visitaron Japón con el propósito de dar a conocer su primer libro conjunto, dialogar con académicos, profesores, estudiantes y especialistas y presentar su metodología en actos públicos y privados en varias universidades japonesas y otras instituciones como el Instituto Cervantes de Tokio. En este contexto se enmarca el encuentro con profesores e investigadores del Centro de Estudios Iberoamericanos de Kansai Gaidai.

La profesora Yokoigawa presentó sucintamente los ocho capítulos del primer libro del Seminario, titulado *Ensayos del Seminario Permanente de Investigación de Arte y Cultura México-Japón. Volumen I. Miradas sobre las intersecciones culturales* (『メキシコ日本芸術文化研究常設セミナー試論集 第一巻 ―文化交差へのまなざし―』) y publicado en México en edición bilingüe, en español y japonés. Este libro colectivo indaga en los puntos de contacto que se dan entre las esferas artísticas y culturales de estas naciones centrándose en paralelismos, coincidencias y diferencias. Los autores estudian las intersecciones artísticas y teorizan sobre las influencias mutuas que desde del siglo XVI marcan las relaciones entre Japón y México. Concretamente, los cuatro capítulos de la primera parte sobre ‘Intercambio Cultural México-Japón’ reflexionan sobre el imaginario artístico del pintor Tamiji Kitagawa, la interpretación de ‘lo mejicano’ en los pintores japoneses Kishio Murata y Shinzaburo Takeda, los vestigios de la vanguardia japonesa *mono-ha* en México y dos piezas de arte audiovisual contemporáneo sobre la memoria de los migrantes japoneses en México. La segunda parte del libro está dedicada a ‘Estudios Culturales Comparados’ y contiene tres capítulos, uno sobre cultura material religiosa que presenta la relación entre el rosario cristiano y el *juzu* budista, otro que estudia las analogías entre las películas *Roma* y *Shin-Gojira*, y otro que analiza la pieza de teatro *noh Sacbé Rojo* como una propuesta de dramaturgia desde el mestizaje. La tercera y última parte sobre ‘Educación Cultural’ está compuesta por un solo capítulo sobre cómo se enseña la cultura japonesa a los niños mexicanos. Este libro, va más allá de los estereotipos, pone énfasis en lo que un país puede aprender del otro, y propicia un espacio de pensamiento, crítica y

debate alrededor del arte y la cultura de México y Japón. Sin duda llena un vacío importante en la literatura académica en español sobre los encuentros culturales entre México y Japón, por lo que es una importante contribución en ese campo. Con la oficialización de los estudios japoneses en España y América Latina en las últimas décadas y la creciente popularidad de la cultura japonesa entre los estudiantes universitarios hispanohablantes, se ha hecho evidente la necesidad de publicar manuales universitarios en español sobre cultura japonesa basados en investigaciones rigurosas, y precisamente este es uno de los futuros proyectos colaborativos de este grupo.

La segunda parte del acto consistió en una presentación de investigación por la profesora Arimura sobre su capítulo en el dicho libro, un estudio comparativo de piezas de arte sobre el rosario cristiano y el *juzu* budista en el Japón premoderno. Concretamente, después de presentar diferentes teorías sobre el origen del uso de rosarios para fines religiosos, argumentó la posible influencia de la estructura de los mandalas asociados a la escuela budista de la Tierra Pura sobre dos representaciones pictóricas de los 15 misterios del rosario cristiano producidas en Japón en el siglo XVI-XVII. El uso de imágenes de alta calidad hizo muy fácil de entender sus argumentos. Hay que enfatizar que el libro presentado incluye un apéndice final de veinticinco páginas con fotografías en color.

El turno de preguntas dio lugar a una interesante discusión entre los participantes, moderada por la profesora Carla Tronu Montané. Además de responder a las preguntas y comentarios de los participantes, también hubo tiempo para que la profesora Yokoigawa hablara un poco más detalladamente sobre su capítulo sobre producciones audiovisuales sobre migrantes japoneses en México. Las visitantes manifestaron su interés en futuras colaboraciones con investigadores con base en Japón para desarrollar las investigaciones y proyectos en curso o plantear nuevos campos de estudio. El acto terminó con un saludo de cierre y agradecimiento a todos los participantes en el encuentro por parte de la profesora Ayuchi Toritsuka 鳥塚あゆち. Esperamos con ilusión tener noticias de las futuras actividades y publicaciones del Seminario.

要約

「メキシコ日本芸術文化研究常設セミナー」との学術交流

トロヌ・モンタネ, カルラ (関西外国語大学)

イベロアメリカ研究センターでは、2022 年 10 月 21 日に「メキシコ日本芸術文化研究常設セミナー (Seminario Permanente de Investigación de Arte y Cultura México-Japón)」から横井川美貴氏と有村理恵氏をお招きし、学術交流を目的とした研究会を開催した。同セミナー

一は、日本とメキシコの芸術文化の学際的研究グループを形成し、学術交流や文化普及を通して両国の相互理解に貢献することを目的に、メキシコで設立されたものである。研究会では、横井川氏から、メキシコで出版された『メキシコ日本芸術文化研究常設セミナー 試論集 第一巻 ―文化交差へのまなざし― (*Ensayos del Seminario Permanente de Investigación de Arte y Cultura México-Japón. Volumen I. Mirada sobre las intersecciones culturales*)』の内容が紹介された。有村氏からは、キリスト教のロザリオと仏教の数珠の比較研究が発表された。研究会には、本学外国語学部の教員らが参加し、今後の学術・教育交流を見据えた意見交換が活発に行われた。(要約 鳥塚あゆち)

教員エッセイ

ルミ

土井 裕文（関西外国語大学）

Rumí

DOI, Hirofumi (Universidad Kansai Gaidai)

Resumen

La palabra española *rumí* había proveniendo del árabe, en el que se refería a *romano* o *bizantino*, que significaría más tarde "cristiano entre los musulmanes".

Esta voz de origen arábigo consta de dos morfemas: Roma (nombre de la ciudad) + í (sufijo adjetival).

ルミというタイトルから、人の名前を想像させたかもしれません。呼びかけているようにも見えるので、ひょっとしたら、初恋の人に何かを訴えている？というイメージを抱かせたかもしれません。

残念ながら、初恋の人の名前ではありません。スペイン語の単語 *rumí* についてです。今回のエッセイを執筆するにあたり、以下、研究に関連する題材を探す自身の研究日の 1 ページを綴ります。

Alfredo Marquerie, *La antesala del infierno* (Colección austral ; Azul, no. 1594), Espasa-Calpe, 1975. の 8 ページに、スイスのジュネーブ空港からしばらく走った景色の描写が出てきます。

con la inserción animal de las vacas grandes y pacíficas, eternas pastadoras y rumiadoras del jugoso praderío

「のどか」という和西辞典の項目からは候補に挙がってこない *pacíficas* というのが *vaca* (牛) と結びつく形容詞なのだなあと感慨に耽ります。直後の *eternas pastadora y rumiadoras* という表現にも感悟しています。こんなふうに「ずっとモグモグし続けている」ことは表すのですね。

情景描写に登場した *rumiador* 「反芻する（動物）」という単語を白水社の『スペイン語大辞典』（2052 ページ）で調べていると、同ページの最上段に *rumí* という単語が目にとまりました。紙辞書ならではの、あの楽しい単語の道草の始まりです。同辞典での説明は次のようになっています。

rumí (中略) 男 [モーロ人の中での呼称] キリスト教徒

キリスト教徒とルミが何の関係があるのでしょうか。私の頭のなかでは、rumiador という単語を調べた影響からか、進行中の行為「道草」という影響からか（もちろん、キリスト教徒がモグモグしている解釈は間違っているのですが）キリスト教徒がモグモグ草を食べているという勝手なイメージから離れられないでいます。

道草したこの語を、小学館の『西和中辞典』でも調べてみると、次のように出てきます。

ru·mí[ru.mí]

男 キリスト教徒：イスラム教徒の間で用いられた呼称。

[← [アラビア] rūmī ; 関連 Roma]

アラビア語から入ってきた単語ということがわかります。気になるのは、関連語の Roma ではないでしょうか。ルミという発音と Roma は近そうですね。ようやくモグモグ rumiador からは脱却できそうです。

スペイン王立アカデミー他 (2014) *Diccionario de la lengua española*, Escapa -Calpe. の 1946 ページを紐解いてみましょう。

rumí

Cf. romí.

1. m. y f. Entre los musulmanes, cristiano (|| que profesa la fe de Cristo).


Cf. のところに、romí という単語が見えてきました。romí を同辞典の 1935 ページで調べてみると、次の説明が出てきます：

romí

Del ár. hisp. rúm, este del ár. clás. rūm 'bizantinos', 'cristianos', y este del gr. bizant. Ῥωμαῖος Rōmaîos 'romano'.

1. adj. desus. cristiano (|| que profesa la fe de Cristo). Era u. t. c. s.

正則アラビア語の母音は、(カナ発音で表記すると) アイウの3つだけですので Roma という都市名はروما (Ruma) とアラビア語で表記されるわけですね。ここにアラビア語の形容

詞化語尾  (スペイン語で綴ると -i)ⁱ をつけたもので、結局のところ、「ローマの」ということだったんですね。

私の最近の研究の1つは、(道草をしながら) アラビア語起源のスペイン語から元々のアラビア文字の綴りに到達することです。もし興味をお持ちの方がいらっしゃいましたら、『関西外国語大学研究論集』117号(2023年3月刊行予定)の拙稿をご覧くださいませ。

ⁱ スペイン語の複数形の作り方で登場する *marroquí* (モロッコ人) や *jabalí* (いのしし: 本来は「山の(豚)」に由来) などは、アラビア語起源の形容詞化語尾 *-í* を伴っています。

編集後記

「南米音楽紀行」を企画した時に、開催する秋までには新型コロナも終息しているだろうとの期待があったが、見事に裏切られた。しかし、ブラジルのボサノバ、パラグアイのアルパ、アルゼンチンのタンゴのそれぞれのアーティストをお迎えして、改めてそれらの音楽を育んだ南米の大地に思いをはせ、心が癒やされた。かつて彼の地の人々も如何ともしがたい事態をやりすごす力を音楽から与えられたことであろう。その他の講演においても有意義なお話を聞くことができた。またメキシコから日本研究者が来学され、交流が実現したことも大きな成果であった。コロナ対応もいよいよ新段階を迎える。さてどんな年になるであろうか。

イベロアメリカ研究センター長 林 美智代

2023 年 2 月発行

発行 KANSAI GAIDAI UNIVERSITY

イベロアメリカ研究センター

〒573-1001 大阪府枚方市中宮東之町 16-1

TEL.072-805-2801（代表）

<http://www.kansaigaidai.ac.jp>